

No.2808

ポスト・スハルト期インドネシアのイスラーム社会と大衆文化の変容をめぐる
人類学的研究

首都大学東京大学院 博士後期課程：社会人類学教室

荒木 亮

ポスト・スハルト期と呼ばれる今日インドネシアでは、民主化や地方分権化が進展するとともに、都市中間層を中心として人々の「イスラーム化」が進行している。同時に、その影響は地方社会や村落といった一般庶民にも浸透しつつある。そこで、採択1年目にあたる H29 年度は、同国第三の都市とされるバンドゥンとその郊外に位置する村落社会（K 村）での延べ 6 カ月にわたる人類学的フィールドワークに基づき、現地社会における宗教の諸相について、以下のことを明らかにした。

1. 都市におけるイスラームの展開 世界的なイスラーム復興の顕在化と時期を同じくして、インドネシアでもイスラーム的な「正しさ」を希求するムスリムの増加がみられる。ただし、イスラームの純化が、必ずしも、信仰心の深化によって駆動・展開しているとは言い切れない。報告者は、今日のインドネシアでみられる小巡礼の人気現象を事例に、インドネシアにおけるイスラーム化が個々人の敬虔さと自己の（社会・経済的な）威信の担保を目的として展開していることを指摘した。

2. 村落社会におけるイスラームのあり方 都市部でイスラームの前景化がみられる一方で、村落社会では（イスラームの教義からすると部分的に相容れない）伝統文化の尊重やそこに自己のアイデンティティを見出す状況がみられる。実際、報告者が調査滞在する K 村では、憑依儀礼といった土着の慣習が伝統復興の流れのなかでますます盛り上がりを見せている、という状況を確認した。

3. まとめと採用2年目の課題 今後は上述した都市と村落との差異に着目して現地調査を進めるとともに、インドネシアの近代化——ある文脈ではイスラーム化であり、同時に、伝統復興（文化の客体化）でもあり、またインフラの整備や消費文化、新自由主義的経済の浸透といった事象を含む——を、現地社会における宗教の位置づけや人々の信仰という視点から明らかにしたい。